

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「ミラビリア」と「アジャーイブ」をつなぐもの：
共同研究：驚異譚にみる文化交流の諸相：
中東・ヨーロッパを中心に（2010-2013）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 由里子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4894

「ミラビリア」と「アジャーイブ」をつなぐもの

文・写真
山中由里子

共同研究 ● 驚異譚にみる文化交流の諸相 ― 中東・ヨーロッパを中心に (2010-2013)

辺境・異界・太古の珍しい自然現象や生き物や遺物は、中世ヨーロッパにおいてラテン語で *mirabilia* と呼ばれた。一方、中世イスラーム世界においては、この世の摩訶不思議は、アラビア語・ペルシア語で '*ajā'ib* と呼ばれる。「ミラビリア」も「アジャーイブ」も、「驚異、驚異的なもの」を意味する語の複数形である。異邦のさまざまな「驚異」の不思議を描写する言説をカタログ的に連ね並べた書物は、ヨーロッパと中東のいずれにおいても12-13世紀頃に開花した。

同じ意味を共有する「ミラビリア」と「アジャーイブ」は、ヨーロッパと中東においてそれぞれ具体的に何を指し、どのような精神的土壌から生まれたのか。ほぼ同じ時期に「驚異譚集」が盛期を迎えた歴史的背景は何なのか。どのような前史があり、その後どのような展開を遂げたのか。双方が共有する情報源やモチーフは何か。特定の逸話が東西に伝播した経路を追うことはできるか。本共同研究では、西洋文学、西洋史、中東史、比較文学といった、普段交流することが少ない異分野の専門家が協力してこれらの問題を検証し、驚異譚をめぐる各時代・地域の世界観の相違、文化交流のダイナミズムを解明してゆこうとしている。

本稿では、先行研究の吟味と「驚異」の定義が試みられ、共同研究の枠組みと方法が議論された第1回目の研究会の様子を紹介する。

まずは筆者が、アラビア語・ペルシア語の「驚異の書」の代表的な作品の序文から、驚異の意味や、驚異を綴る動機に関する部分を引用し、「驚異譚」というジャンルの「磁場」の中心

にあるものが何かを原典の中に探った。たとえば、スペインのアンダルシア地方からエジプト、シリア、ペルシア、コーカサスを通してヴォルガ川流域まで旅をした学者ガルナーティーがアラビア語で記した『精髓の贈り物と驚愕の精粹』（1162年頃）の序文には次のようにある。

理性を持った者は「正当な驚異」の話を聞けば、それが正しいと判断し、それを語る者を嘘つきだとは決め付けず、間違いだと言うことはしない。一方、無知な者は、自分の目で見ていないことを聞くと、語る人が嘘つきで、なつ造をしていると批難するであろう。それは、知性がほとんど無に等しく、教養も限られているからである。（筆者訳）

この作者はまた、「知性を備えた者や識者は、可能なことと不可能なことの違いを知っている。至高の神の創造物の驚異を語ることは立派なことであり、それを伝えることによって至高の神が創造物の驚異にこめたその万能が明らかになるのである」と、初代カリフのアブー・バクルの言葉を引用して書いている。

自ら広く旅をして珍しい事を見聞したこの著者がいう「正当な驚異」とは、その実在が知性と教養を備えた人間には合理的に説明できる「可能なこと」（自然界に存在しえること・もの）である。それはけっして想像力に任せて作り上げた虚構ではなく、驚異を「嘘」と決めつけるのは「無知」であるからに過ぎないとガルナーティーは強調している。さらには、驚異はそれを創造した「神の万能」を示す証拠であるため、驚異を



イギリスのストーンヘンジ。魔術師マーリンが建設したという語りもある。

語ることは賞賛すべきであるとも述べている。当時、『千夜一夜』のような物語はアラブの知識層には「フラーフア(ほら話)」と呼ばれ、蔑まれる傾向にあった。ガルナーティーは、自分が諸国を周歴し集めたのはそのような作り話とは一線を画す有益な情報だと、自己正当化しようとしているわけである。

一世紀ほど後のカズウィーニー(1203-1283/4)は、驚異をより博物学的に体系化した『被造物の驚異と万物の珍奇』をアラビア語で記している。本書の始めには、「驚異とは、物事の原因が不明であったり、それがどのような作用をどのように及ぼすのかが分からない時に、人が混乱におちいることを言う」と、簡潔に定義されている。これに続いて、蜂の巣や蜂蜜の例が挙げられ、蜂がそれらを作り出す因果関係を知らなければきわめて不思議な現象であるが、知ってしまえば驚異ではなくなるといったことが書かれている。驚異の発見が科学的探究につながることをうかがわせる。

比較の対象としてたいへん興味深いので、近い時代の英国で、ティルベリのゲルウァシウスが驚異譚集『皇帝の閑暇』(1209-1214年)に記した次の一文も引用した。

そして《驚異》という言葉は、自然のものでありながら、わたしどもの理解を超えた物事を指すとらえています。しかるにじつは、《驚異》を創るのは、ある現象の原因を説明することのできない、わたしたちの無知なのだというべきです。(池上俊一訳、傍点訳者)

これらの著作を見る限り、現象とその原因の因果関係がいまだ解明されていないもの、凡常でないもの、未知のものを驚異と捉えるという共通性が、中世の中東とヨーロッパにおける驚異譚のジャンルの「磁場」の中心にあるのでは、とひとまずはいえる。

実はヨーロッパのみに関していえば、中世・近世の驚異譚の研究にはかなりの蓄積があり、歴史的変遷の解明と理論的枠組み作りがかなり進んでいる。今回の研究会では、池上俊一(東京大学)がジャック・ル＝ゴフ、クロード・ルクトゥー、キャロライン・バイナムなどによる中世ヨーロッパの驚異に関する主な先行研究を紹介し、続いて見市雅俊(中央大学)が中世から近代にかけてのヨーロッパにおける驚異の観念史をダストンとパークの著作をもとにまとめた。紙面が限られているため、ヨーロッパの驚異学がこれまでに明らかにしてきたことをここに要約するわけにはいかない。しかし、各氏の発表と全体討論を通して、本研究において比較の基軸となりそうないくつかの重要な問題点が具体的に浮かび上がったので、以下にまとめる。



第1回目の研究会の様子。

まず、ル＝ゴフの研究を筆者が理解した限りでは、中世キリスト教世界において「驚異」は自然界の現象であって、神あるいは悪魔の領域である「奇蹟」や「妖術」などとは別の性質のものと捉えられていた。これに対し中世イスラーム世界においては、驚異も奇蹟もすべて神のなす業とみなされ、現象の現れ方に違いはあっても最終的にはいずれも神に帰結するという考えが強くあった。つまり、神の存在と自然界の関係の中に驚異がどのように位置づけられているかという点において、キリスト教的驚異とイスラーム的驚異の間には観念的なズレが感じられる。これは自然哲学や宗教哲学とも関わってくる難しい問題なので、今後慎重に検討すべきである。

驚異の定義については、際限なく広がりえる研究の対象をどう絞るかという問題が議論の一つになった。筆者自身も、『千夜一夜物語』や『アーサー王物語』といった空想的な要素が強いテキストを「驚異譚」として扱うかどうか、悩むところであった。比較文学者としては、「女人国」、「動く島」といった特定の驚異譚のモチーフの伝播・変遷に関心があるので、これらが登場する『千夜一夜物語』などを排除したくはない。だがやはり、神話でも、おとぎ話でも、なんでもこい、というわけにもいかない。

全体討論の中で見市から提言があった一つの有効なメルクマールは、「実在の(あるいは実在すると信じられている)トポグラフィーと結びついているもの」、「具体的なかたちのある(そうであると信じられている)もの」であった。たとえば、アーサー王伝説も、ストーンヘンジの由来を説明する語りとして使われる場合は、実在のトポグラフィーを持つ驚異譚となる、というわけである。

「ミラビリア / アジャーイブ」の歴史的展開についても議論がなされた。中東とヨーロッパの双方において驚異に対する関心が高まり、地理書、博物誌、旅行記といったかたちで驚異譚が集められ、書きとめられたのが12世紀から13世紀にかけてであるという共通認識は、今回の研究会を通して強まったといえる。今後は、驚異に関する知識の収集・編纂方法をより具体的に比較し、知識の伝播の諸相——たとえば、古代世界の知的遺産がどのように受け継がれたのか、人間の移動によって知がどのように伝わったかなど——を明らかにしてゆきたい。

驚異譚の開花期ともいえるこの時代の後、中東とヨーロッパにおける驚異のあり方は対照的な歴史的展開を見せる。イスラーム世界では、驚異への関心は衰退してゆき、驚異譚集も形骸化してゆくのにに対し、ヨーロッパにおいて驚異学は近代科学、人類学、考古学の登場を促す起爆剤となった。中世ヨーロッパで「所有・領有できないもの」であった驚異が、大航海時代を経て「所有できるもの」となり、実際のモノとして収集・分類・陳列・鑑賞されるようになる。この展開の差は、比較文明史的に非常に興味深い点であり、政治、経済、宗教、物質文化など、さまざまな角度から検証されなければならない。

やまなか ゆりこ

民族文化研究部准教授。専門は比較文学・比較文化。2011年3月に第7回日本学術振興会賞、第7回日本学士院学術奨励賞を受賞。著書に『アレクサンドロス変相：古代から中世イスラームへ』(名古屋大学出版会 2009年、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学学会賞受賞)、編著に『Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from East and West』(I.B. Tauris 2006)。